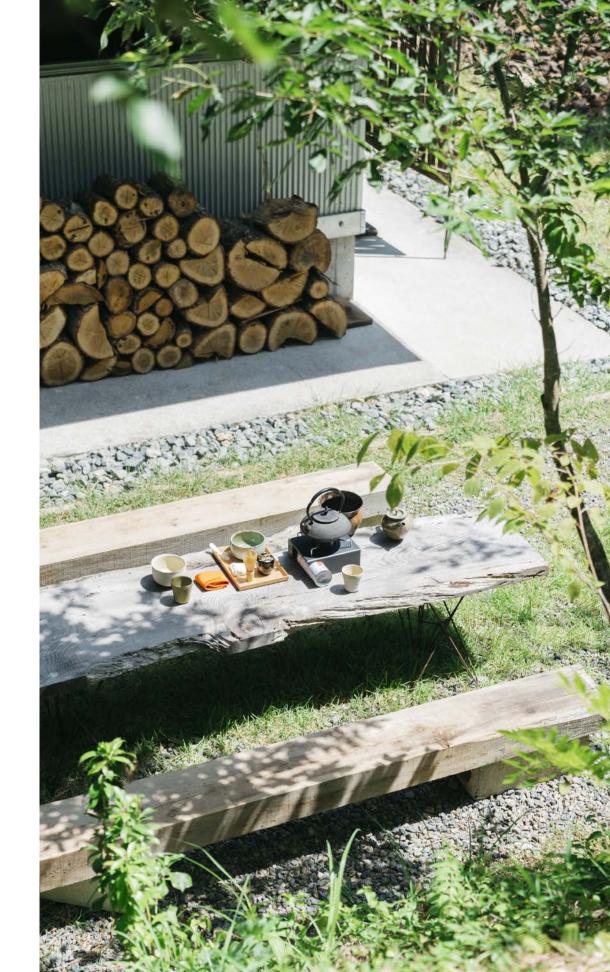


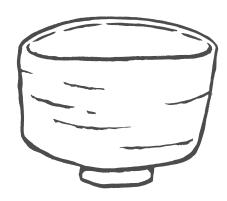
深呼吸

発行元:邑南町役場 定住促進課 〒690

定住促進課 〒696-0192 島根県邑智郡邑南町矢上6000



深呼吸 1



森脇製陶所森脇 靖

### 山あいのアトリエへ。

見渡すかぎりの木々。

どこまでも続く山々。

豊かな緑に囲まれたこの街で

どこにでもある風景、

どこにでもある自然とともに

ここにしかないくらしを

楽しむ人を訪ねた。

山あいの、また少し先へ。



大きく目立つわけではなく、 違和感を放つわけでもなく 風景に溶け込むように 森脇製陶所はそこにあった。 日々、土に手を添える。

日々、器作りに向かう。

それだけにとどまらない場所だという森脇さんのアトリエ。

そこには訪れる人に、

自然と人との境界を感じさせないほど 澄んで清らかな空気が漂っていた。

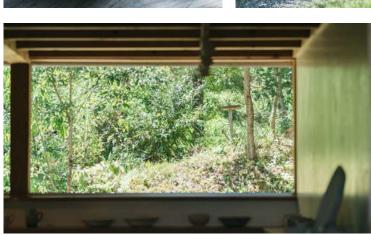




感じるようになって始めました。」 の木が好きだな、とかそ ると木陰っていいなとか、アカシデ に違和感があったことと、植えてみ エを建ててみて周囲に木がない状態 かなりの労力を要する。しかしなが を切り、植えて根付かせるまでには ても決して簡単なことではない。根 植されたものだ。移植と一言で言っ 森脇さんの手で裏山から一本一本移 の声が響く。そこにある木の多くは る。木々たちが風に揺られ、子供たち ら森脇さんの言葉は軽やか。「アトリ アトリエのそばには小さな林があ

場所になっている。「冬は裏山で切りんだりバーベキューをしたり憩いのんだりバーベキューをしたり憩いのの遊び相手だ。林のそばにはテーブの遊び相手だ。林のそばにはテーブ ます。体を動かして薪を切り、木陰でむことと環境はセットだなと思い割り薪ストーブを使っています。住 休み、それで暖をとる。とても自然な 出した木を車で引っ張ってきて薪を る様々な植物、鳥や虫たち全てがこ 次々に育つ木々も、そこから生まれ う空気や風景を生み出している。 木々が鮮やかに目に写り、そこに漂アトリエの中からは緑の生い茂る イクルですよね。」

















# 自然と受容

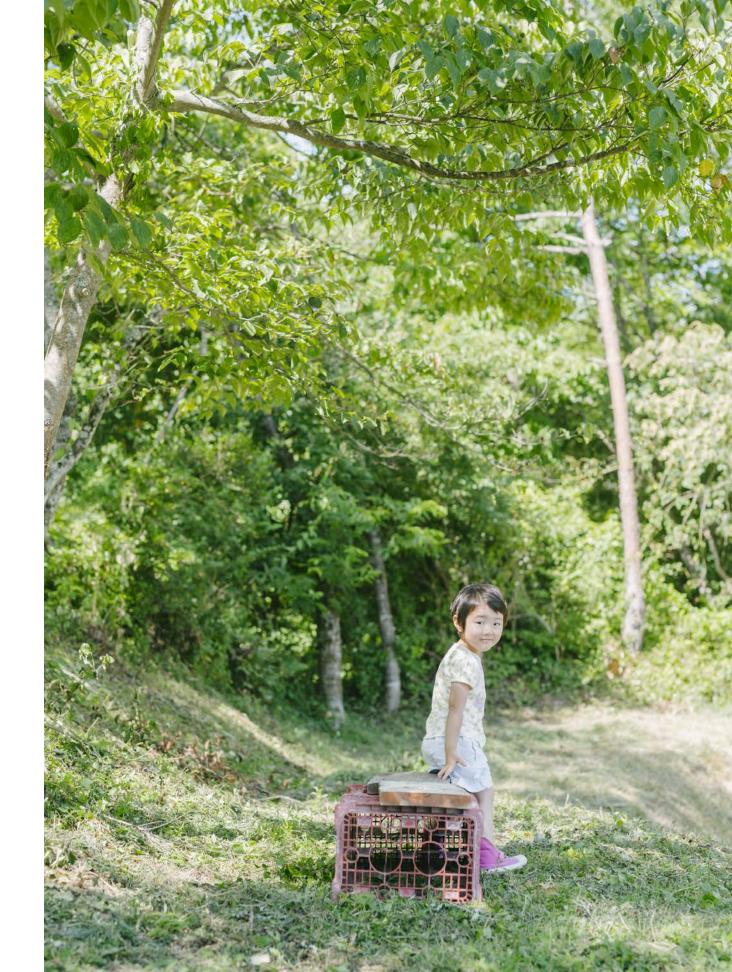
変わってきました。ここで過ごす子供た 供が生まれて子育てをすることも全て わる。「木を植えて大きくなることや、子 広がりますよね。最初は作陶してお客様 良い。自然に囲まれると許容する範囲が りなかったから、余計に自然の中で過ご いて、私は自然の中で遊んだことがあま ちを見ていると遊びが自然に生まれて 大きくなるにつれてこの場所の存在も での時間を楽しんでいる。「子供たちが 大きな感動があって、自分たち自身が受 をあげながら元気に子供たちが走りま をする森脇さんの周囲を楽しそうな声 楽しむ場所に変わってきています。」話 をお迎えするだけのアトリエでしたが、 す。」都会で育った奥様もまたアトリエ 一緒で、自然の摂理と言いますがコント 入れることの大切さを教えてくれま 供が大きくなるにつれて今は家族が ら大きな声を出しても、走り回っても ルできないことです。でもそこには クの家だと思っています。ここはい クの家で、アト リエはフィ







すっていいなと感じています。」



# 畳とお茶

を習っていたのですが、教室に通うの とサイズが合って。妻はもともとお茶 話になって実際にはめてみると、計算 がいるので畳があるといいねという れることもあるし、私たち自身も子供 たんです。そこに小さなお子様が来ら ここの畳の間で点ててみればいいと。 していたわけではないのにぴったり お客様を迎える。「最初は板の間だっ あり、森脇さんはそこでお茶を点てて も難しくなり、だったら道具はあるし トリエの中には小さな畳の間が

楽しんでいくことで変わっていくと 家族で一緒に楽しむようになり。全て 物アレルギーが分かりお茶菓子なら 作る器にはお碗が加わった。「自然と なるようなことも、全てを受け入れて て。何か頭で決め事をすると動けなく が不思議なことにつながって、広がっ になりました。」そこから森脇さんが 作法などは特に気にせず段々と私も みんなで楽しめると和菓子とお茶を ようになり、そうするうちに次男の食 お茶を点てるようになり、お椀も作る お茶を点てることに興味を持つよう















感じます。」

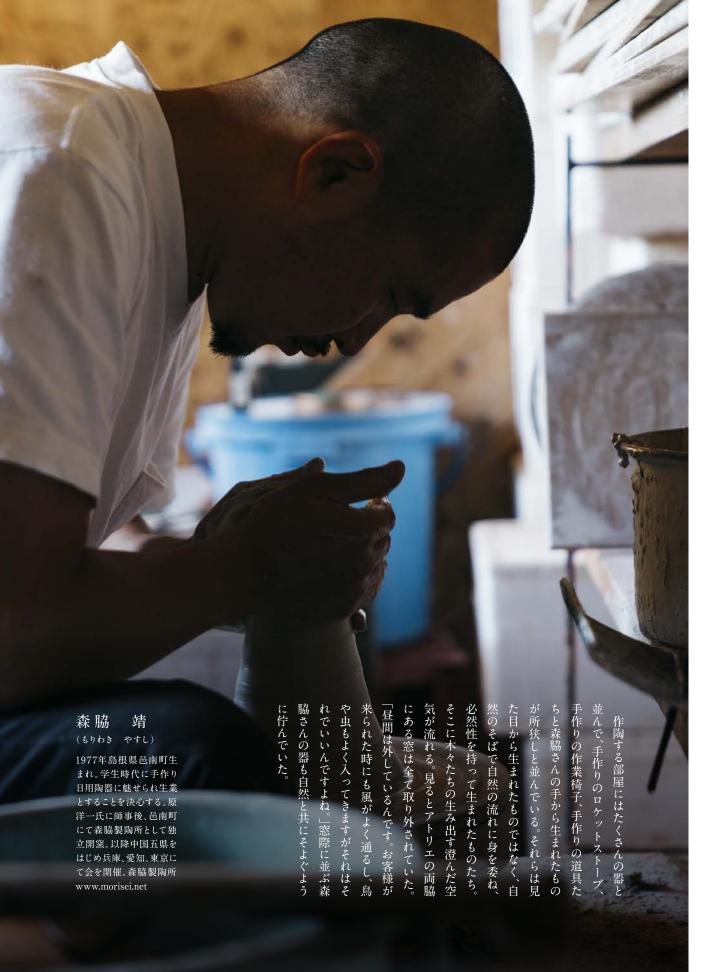




# 陶と対話 井

を感じたんです。」多様性のある器 や人のそばにある器の存在に魅力 とその周辺にいる人とのつながり りそのものというよりは、器づくり の世界に興味を持った。「ものづく を持ち学校に通ううちに、今度は器 ことが好きだった。ロボットに興味 まれる。小さい頃から物作りをする さんの手から流れるように形が生 ろくろをまわしながら次々と森脇 土が延びることだけを考えます。」 うまくいきません。ただ気持ち良く 「こういう形にしようと考えると

情が生まれます。」 ぎず、手やろくろの跡さえも大切に るような。土をとるとあまり整えす に合わせて、手の感覚で土と対話す ではないかと。あるものをコント この場所で自然に触れて、子育てを た。「環境は大きく影響しています。 まれるのか。そんなことを問い始め 郷である邑南町の原風景から何が生 なものを作ることができるのか、故 します。だからこそ一つ一つ違う表 ロールするのではなくて、土の特性 りで。でもそれに近いことで良いの して、思い通りにならないことばか づくりを見るうちに、自分にはどん





## と器





エピソード

Episode

私がアトリエを訪ねたのは暑い夏の日だった。と子供たちが次々と声をかけてくるのが何とも 一歩中に足を踏み入れるとひんやりと心地の良 愛らしかった。空気、風、水、温度、遊び、全て不 い空間が広がっていて、エアコンがあるわけで 自然なものが何ひとつない、ご家族の一貫した はないのに、外された窓から吹き抜ける風と扇 ライフスタイルが無性に心地良く、新鮮に感じ 風機だけでこんなにも快適な空間になるのだ られた。帰り際に「お土産。」とまだ小さな娘さ と感心した。取材の合間に奥様が出してくだんが渡してくれたのは、可愛らしく紐で結ばれた さった冷たい井戸水もまた印象に残っている。 袋に入った玉ねぎとブルーベリー。ご夫婦が大 お話を伺う間、森脇さんの後ろでは「お父さん、切にされていることが、子供たちにも脈々と受

うさぎがおったよ。」「ブルーベリー食べる?」 け継がれていると感じた。(ライターS)



藤彌葵実

### 深呼吸

STAFF

Editor 湯浅 孝史 藤彌 葵実

Photographer 足袋井 竜也

Writer 米田 幸

Designer 米田 光希

発行元 邑南町役場 定住促進課

2019年3月 発行

本誌掲載の内容の無断掲載および写真、 イラスト等の無断複写を禁じます。



思っています。 り入れた暮らしにより、木に囲まれめることにしました。木を上手に取 かどうか、ぼく自身も知りたい、と たこの街での楽しみが増やせそう を通して、木といい関係を持ってい ができるように、本誌では「木育」を る暮らしを知る、ということから始 「木のある暮らし」に置き換え、取材

このたび取材させていただいた

ね」といった、どこか実態のないよ

て、「いろいろな木育がありますよ す。ですがこの「木育」、幅が広すぎ という想いからスタートしていま 本誌は「木育」を知ってもらおう、

そこで、誰もが身近に感じること

れくらい関わってくるものなのか うな感じになってしまい、自分にど

いまいち掴めずにいました。

この森は、ギャラリーの窓から眺め 遮断し、内側には木の実が生り、そ ちのいい表情をしています。 ひとつの作品にも思えるほど気持 ることができ、並んだ器と同じく、 こに小さな獣道もできていました。 森脇さんは、小さな小さな森をつ くっていました。ゆるやかに外界を ね、と妄想してしまいます。 台も、両方あったほうがいいですよ

ならない奥行きがありそうで、エサ

かといって簡単に納得いくものには は遠いところにあるものではなく、

台と木の実、ありだな、と思いました。



やっぱり近くの木の実もこのエサ いるそうで、確かにと思いながらも、 には来ないんじゃないかと考えて す。近くに木の実があるので、エサ台 下の写真)、鳥が寄ってこないそうで 台を置いてるんですが(6ページ左 森脇さん、この森のなかに、鳥のエサ

鳥も集めて、森脇さん越え、とか想像

しだすこともあるんじゃないかと。 案外、木と上手に付き合う暮らし

りして、小さな小さな森もつくって

たくなり、小さな株とか植えてみた やっぱり自分の部屋の窓から眺め 木の種類とか少し詳しくなって、 には集まらず、木の実とか少し意識 すが、このエサ台、やっぱりいい感 をつくることは想像できません。で んのように、あんなおしゃれな空間 してしまうと思います。で、たぶん、 じでした。きっとやってみると簡単 らし」を紹介していますが、森脇さ 本誌では「木と上手に付き合う暮

